継承か、断絶か
――ドイツ青年音楽運動とヒトラー・ユーゲントにおける音楽活動の連関に関する政治的評価をめぐって――

牧野広樹

1980 年代以降の音楽史研究は、第三帝国期の音楽状況をヴァイマル共和国期から第三帝国期を経て第二次世界大戦後へと続く連続性というマクロ的な観点から理解しようと試みてきた。本稿は、ドイツ青年音楽運動からヒトラー・ユーゲントにおける音楽活動への移行過程をミクロ的に検討することで、この時代的連続性という観点の問い直しを試みるものである。

従来の音楽史研究において、ドイツ青年音楽運動は第三帝国期におけるヒトラー・ユーゲントの音楽活動を準備したものとして記述されてきた。そこではドイツ青年音楽運動の活動家たちは既にヴァイマル共和国期より国民社会主義的なものとの親和性を持っていたとされており、あたかも国民社会主義的な思想を彼らが 1933 年以前から抱いていたかのように捉えられている。確かにドイツ青年音楽運動は、「開かれた歌唱の時間」をはじめとする活動形式と共同の音楽実践を通した共同体の形成という活動目的、そして雑誌や人材を第三帝国期の音楽活動へと継承させた。一方その継承の裏で、社会主義的な色彩を帯びた民族共同体を夢見たヴィルヘルム・カムラーの共同体理念や、フリッツ・イェーデの教育理念は切り捨てられている。彼らとは対照的に、ヴォルフガング・シュトゥンメはその教育目的を国民社会主義的な政治的・世界観的教化へとすげ替え、ドイツ青年音楽運動の枠組みを継承することに成功した。

カムラーの社会主義的な共同体構想やイェーデの多様性を担保する教育理念が切り捨てられていることを鑑みると、ドイツ青年音楽運動はシュトゥンメによって形式的な枠組みのみ第三帝国期へと継承を果たしたが、その内実においては断絶していると評価すべきだろう。